

稲畑産業株式会社 2024年3月期決算 オンライン決算説明会 質疑応答要旨

日時 : 2024年6月3日(月) 13:00~14:00

説明者 : 稲畑社長

【情報電子事業】

Q : フラットパネルディスプレイ (FPD) 関連の今後の事業環境見通しを教えてください。

A (稲畑) : FPD 関連について、在庫調整の局面からは脱したが、本格的な回復にはまだ時間がかかるのではないかとみている。またスマートフォンの買い替えについて、フラット型の中でも中・小型の買い替えサイクルの期間が大幅に伸びていることも、全体として需要が伸び悩んでいる一つの背景である。そのため、当面の間は停滞気味で、回復するとしても2024年夏以降ではないかとみている。

【合成樹脂事業】

Q : ナフサ価格および合成樹脂の今後の市場環境見通しを教えてください。

A (稲畑) : 国産ナフサ価格は、最近の中東ガザ地区の問題などのリスクを受けて、やや高めに推移している。加えて、日本においては円安の要素もあるため、1kg当たり7万5,000円を超えていく見通しである。また、労務費等々の各種コストも上昇しているが、価格改定の中にはまだ織り込まれてない部分があり、今後はそれらを織り込んだうえで、さらに価格が上昇するのではないかとみている。ご説明したとおり、24/3期のOAの市場環境は特に不調だったが、これはコロナ後に大きく落ち込んだオフィス需要が過剰回復し、その反動が来ているのが今の状況ではないかとみている。既に緩やかに回復してきているが、オフィスレスやペーパーレスという流れは、コロナが終わっても一定程度続くと思われるため、長期的にはもう少し減少するのではないかと考えている。短期的には、昨年に比べて回復しているとみている。また、OA業界で特徴的なのは、リサイクル材に対して非常に積極的であることで、リサイクル材の需要が急速に立ち上がってくると期待している。

【樹脂コンパウンド投資】

Q : 新中期経営計画 NC2026 の3年間におけるコンパウンド事業の生産拠点拡充計画について

て、場所と完成時期を伺いたい。合成樹脂事業では、自動車分野において高成長地域であるインド、メキシコなどの拡充を図るとのことだが、インドにもコンパウンド生産拠点を設ける計画があるか。

A (稲畑) : コンパウンド生産拠点の拡充計画について、まだ具体的に時期等までは決まっていないが、稼働が上がってきているメキシコについては足元の受注が好調で、NC2026中に恐らく増設することになるのではないかと考えている。東南アジアは、昨年 OA 関連が不調で回復途上にあるが、今の段階ではまだ増設が必要な状況ではない。インドについては、今のところ決まっている予定はない。

また、株式会社ダイセルとのコンパウンド樹脂の合併会社を、2024年7月設立予定で準備を進めている。合併会社から新たに出てくる技術や生産アイテムが、各コンパウンド拠点に今後広がっていくことを期待している。

コンパウンド事業について、2024年3月期の販売数量は12.8万t、売上高でおよそ370億円余りだったが、2025年3月期では少し増えて13.5万t程度、売上高410億円余りに回復してくる見通しである。

【業績】

Q : 終わった中期経営計画 NC2023 について、3 期連続で売上高・営業利益とも過去最高を更新できた要因は何か？

A (稲畑) : 売上高については期間中、円安傾向が続く追い風があった。加えて、最終年度においては新規連結の効果もあった。それ以外にも、例えば合成樹脂事業の自動車分野は想定以上に売上を伸ばした。一方マイナス要因は、合成樹脂では当初の想定以上に最終年度の OA 関係の市場環境が悪かった。また、FPD の状況も回復基調にあるものの、当初計画を作った時点で想定していたよりも、パネルメーカーの稼働が低迷した時期は相当長かった。全般には、それぞれの部分で想定外の要因もあったものの、伸ばすべきものは着実に伸ばすことができた。

【新中期経営計画 NC2026】

Q : NC2026 で、新たにキャピタルアロケーションを提示した意図は何か。

A (稲畑) : 従来から、キャピタルアロケーションに関する質問が多かったためである。例えば、「新しい中期計画では成長投資・株式還元のどちらに重点を置くか」や、成長投資額の規模等に関する質問が IR 面談でよくあった。そのため、今回はあらかじめ分かりや

すい形で表現しようということで提示した。ここで掲げた営業キャッシュフロー等 650 億円程度というのは、3 期累計の当期純利益計画（535 億円程度）に 3 期累計の減価償却費見込み（115 億円程度）を足したものである。

Q : NC2026 の全社成長戦略で、特にポイントとなるのは何か。

A（稲畑）：従来、当社はどちらかといえばオーガニックな成長で、急激ではないが着実に成長するところに特徴と良さがあるというお声も頂いていた。ただし、最終的に長期ビジョンを達成するためには、オーガニック成長だけでは足りないという自覚のもとに、この中期計画では、特に投資の積極化を成長戦略の柱の中に据えた。これはオーガニック成長に加えて、マジョリティーを含む投資を積極的にしていきたいということで、終わった NC2023 の中でも、ある程度こうした投資を行ってきた。引き続き投資の機会を狙い、これを着実に当社の事業の中に取り込むことで、成長を加速させていきたいと考えている。

【サステナビリティ中期計画】

Q : 新たにサステナビリティ中期計画を提示したが、特にポイントとなるものは何か。

A（稲畑）：サステナビリティ中期計画を、2024 年 5 月の決算発表と同時に公表したが、従来から公表しているマテリアリティに沿った形で、具体的な KPI・目標を設定したことがポイントである。例えば GHG 排出量の削減など、言うならば「やらなければならないこと」も表現しているが、同時にサステナビリティについては、「やることによってビジネスチャンスにつながる」側面もあると考えている。そのため、ビジネスチャンスの側面から、例えば「環境関連ビジネスで 27/3 期売上高 1,000 億円以上」など、具体的な目標を掲げた。さらに、当社が一番重要と考えている人的資本についても、詳細な項目について KPI・目標を設定しており、活用に取り組んでいきたい。